

## 2050年二酸化炭素排出実質ゼロ立山町宣言

古から山岳信仰の山として日本三霊山のひとつに数えられる「立山」。その山の名を冠した「立山町」は、面積の約8割が山岳、森林地帯で自然に恵まれた緑豊かな町です。

山岳部の地形は変化に富み、立山黒部アルペンルート、黒部ダム、ラムサール条約登録湿地弥陀ヶ原・大日平、落差日本一の称名滝を有し、国内外から年間約100万人の観光客が訪れます。

立山連峰を源とする常願寺川の清流は扇状地を形成し、平野部には豊かな田園が広がっています。同時にその豊富な雪解け水は肥沃な大地を潤し、コシヒカリをはじめとして、私たちに実りをもたらしています。

立山町は、1989年(平成元年)の第1回みどりの日に「みどり維新の町」を宣言し、「立山町みどりの憲章」を制定しました。憲章には、「立山町民は、みどり維新の町をめざし、あらゆる生命が息づく地球をいたわり、限りある地球の資源を大切に、緑の地球を守るために世界の国ぐにが、しっかりと手をつなぐよう求めます。」と記してあります。

この「みどり維新の町宣言」を契機として、立山町では官民が一体となり、様々な環境施策に取り組んできました。1991年から始めた資源ごみの分別収集は、分別したビンや缶などの売却益に町が報奨金を上乘せして自治会へ還元するもので「立山方式」と呼ばれ、先駆的な取り組みとして全国的に注目を集めました。

近年では、ごみの減量化のほか、低炭素なまちづくりを推進するため、町内の小中学校を始めとする公共施設に木質ペレットストーブ・ボイラーの設置、太陽光発電・蓄電設備の設置、高効率空調設備の導入のほか、町内の街路灯、防犯灯をほぼLED化するなど二酸化炭素排出削減に取り組んでいます。

また、水と緑の森づくり税を活用した里山の竹林整備や、林業担い手の確保のため自伐型林業従事者を公募するなど二酸化炭素を吸収・貯蔵し、地球温暖化防止に寄与する、森林の保全にも積極的に取り組んでいます。

本年は暖冬に続き、全国で過去最高を記録する猛暑日が続きました。地球温暖化による気候変動が、気温を上昇させていると考えざるを得ません。また、1000年に一度と言われるような豪雨災害が毎年、全国各地で発生しています。立山カルデラを有し、日本一の急流河川である常願寺川が流れる立山町においても、いつ災害が起きても不思議ではなく、人ごとではありません。地球温暖化問題は、21世紀において、私たち人類が解決しなければならない最重要課題の一つです。

立山町は、2017年に改訂した「立山町地球温暖化防止実行計画書」による地球温暖化防止のための取組を着実に実施するとともに、小泉進次郎環境大臣の呼びかけに呼応し、町民、事業者が一体となり関係機関と連携・協力して「2050年二酸化炭素排出量実質ゼロ」の実現に積極的に取り組むことをここに宣言します。

2020年(令和2年)10月1日

立山町長

舟橋貴之